

第4回環境コモンズフォーラム

# ハスカップ新時代に向けて

～勇払原野の風土と資源を持続的に共有するためのイニシアチブ～

勇払原野のハスカップをテーマに、保全並びに栽培と商品開発等、川上から川下までの地域住民のつながりについて捉え直すフォーラムが、環境コモンズ研究会（（一財）北海道開発協会）とNPO苫東環境コモンズの共催で、5月31日(土)に苫小牧市サンガーデンで開催されました。

環境コモンズ研究会の座長である小磯修二北海道大学公共政策大学院特任教授から開催趣旨の説明と挨拶が行われた後、二つの基調提言と関係者によるディスカッションが行われました。

## 基調提言 1

### 今、世界が注目しているハスカップ



今日は、世界のハスカップを含めた生物多様性に関わるいろいろな動きと、勇払原野のハスカップの重要性について、専門の園芸学の立場から紹介します。

#### 植物の遺伝資源

鈴木 卓 氏  
北海道大学大学院農学  
研究准教授

COP (Conference of the Party) は、国際条約の中で環境問題などを話し合う加盟国の最高議決機関です。生物多様性 (Biodiversity) には、“生態系の複雑さ”や“種の多さ”のほか、“遺伝変異の幅広さ”があって、一つの種の中でも遺伝的な変異がどれだけ内包されているかが重要です。

生物多様性条約 (Convention on Biological Diversity: CBD) は1992年に採択され、翌年に発効されていますが、2012年10月現在、193の国と地域が条約を締結しています。しかし、アメリカは、署名はしていますが、批准していません。

生物多様性条約の目的は、次の三つです。

- 1 地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全すること
- 2 生物資源を持続可能であるように利用すること
- 3 遺伝資源の利用から生ずる利益を公正かつ衡平に配分すること

発展途上国からは、先進国に対し自国の植物を持ち出して多くの利益を得ているところから、その利益を還元してほしいという要望が出されています。

一方、アメリカには、各地に国立植物栄養体(クローン)果樹遺伝資源蒐集センター (National Clonal Germplasm Repositories) があります。その中の Corvallis と Geneva を紹介します。オレゴン州にある Corvallis では、ヘーゼルナッツ、イチゴ、ホップ、ナシ、カラント、グースベリー、ブルーベリー、クランベリー、ラズベリーなどの小果樹栽培種および野生種が遺伝資源としてコレクションされ、育種の素材とされています。圃場には世界各地で蒐集されたハスカップ遺伝資源が、2 ha ぐらいの規模で栽培され、分類や利用について研究されています。

2002年にトロントで開かれた国際園芸学会<sup>\*1</sup>で、Maxine Thompson 女史は、ハスカップ (*Lonicera caerulea* L.) の変種で主に勇払原野に自生するクロミノウグイスカグラ (var. *emphylocalyx*) が、オレゴンで受粉を助ける訪花昆虫が活発となるちょうどよい

National Clonal Germplasm Repositories



<sup>\*1</sup> 国際園芸学会 (International Horticultural Congress)  
世界の園芸学研究者が集う国際学会で、4年に一度開催されている。2002年の第26回大会は、カナダのトロントで開催された。

時期に開花することから、よく実り、果実品質も良好であり、栽培化を図る上で、非常に優秀な遺伝資源であることを紹介しました。このため、カナダの栽培・育種に関する研究に、クロミノウグイスカグラが用いられています。

同じ圃場ではコクワやマタタビも栽培され、地域適応性試験も実施されています。ハスカップやコクワのように、もともと北米にはない植物であっても、コレクションして栽培化に向けた研究が行われています。

Genevaでは、リンゴ、酸果オウトウ<sup>※2</sup>、耐寒性のブドウなどのコレクションをしていて、次のような事業が行われています。

① 栄養繁殖性遺伝資源の維持

一度その植物が地球上から消えてしまうと二度と復活させることができないので、日本のものも含めたリンゴ3,909品種・系統を広大な圃場に2本ずつ植えて維持したり、それぞれのデジタルイメージの保存や、冬に採った枝の一部を凍結保存して、必要ときに芽接ぎして回復させるバックアップもしています。

② 新しい遺伝資源の蒐集・獲得事業

果実の野生種は世界中にあるので、何度も探索に行き、各地の情報と採取した植物の情報を記録するとともに、種を採って-20℃で保存し、枝は接ぎ木して栄養体を育てています。

③ 病害抵抗性のスクリーニング

遺伝資源として蒐集・獲得した野生種の中から、日本には上陸していない、細菌が原因の火傷病（fire blight）が出にくい種類を選んで、その病気に対する抵抗性の品種を育成しています。

④ 遺伝資源の頒布

世界中の研究者からリクエストがあったときに、有償で苗木や種を提供しています。

このように、アメリカでは自国の利益だけではなく人類の公益に資することを目的に、遺伝資源の蒐集・保存に莫大な経費を投入しているので、発展途上国に利益を還元するのはおかしいというのがアメリカの主張です。

世界が注目する苦東のハスカップ

勇払原野のハスカップは、開発に伴って野生の自生株が厳しい状況にあるということですが、幸いにも旧苦東会社によって「つた森山林」に1.5万株が移植さ

れています。これは非常に重要な遺伝資源です。

勇払原野に自生する株と、20年前に同じ自生地から北海道大学の圃場に移植した株の果実に含まれる一部の栄養素に違いが見られました。これは、栽培化が原因でハスカップの形質に影響を及ぼしているものと考えられます。おいしいハスカップにするための栽培化は大切ですが、野生を含む多様な遺伝資源を残すことが、これからハスカップに関連した産業を発展させる上でも非常に重要です。単一の成分だけを多く含んだものの栽培はできますが、栽培したハスカップに病気が出たとき、多様性を持った野生資源がないと改良することができませんし、その病気に強い野生種があれば、耐性を持つハスカップとすることができます。そのための遺伝子のプールとなっているのが、ここ勇払原野に自生するハスカップです。

また、勇払原野で山火事などですべての遺伝資源が燃えてしまう可能性があり得ます。できれば貴重な資源は分散して保存するのが望ましいので、ある程度は行政や国が関わらなければならない問題です。それくらい、野生のハスカップの遺伝資源は重要なのです。世界中でもハスカップの1変種であるクロミノウグイスカグラの自生株集団は勇払原野にしかありません。これは人類の貴重な財産だということを、苫小牧市民や近隣自治体の方ばかりでなく、皆さんにも再認識していただきたいと思います。

補足ですが、アイヌの呼び方からきているハスカップは、ローマ字書きした“haskap”が世界共通の果樹の名前として使われています。

基調提言 2

ハスカップの保全と苦東

NPO苦東環境コモンズは、苦東の未利用地でかつ魅力的な原野の部分を保全活動をしながら地域住民がみんなで利活用できるコモンズ的な場所にしようと、榎苦東さんとの協定によって使わせていただいています。



草薙 健氏  
NPO法人苦東環境コモンズ  
事務局長

※2 酸果オウトウ(Sour CherryまたはTart Cherry)  
スミミザクラ（酸実実桜、学名:Prunus cerasus）は、ヨーロッパや南西アジアに自生するバラ科サクラ属サクラ亜属に属する植物である。スミミザクラはセイヨウミザクラに近いと考えられるが、スミミザクラの果実のほうが酸味が強く、料理に用いられる。

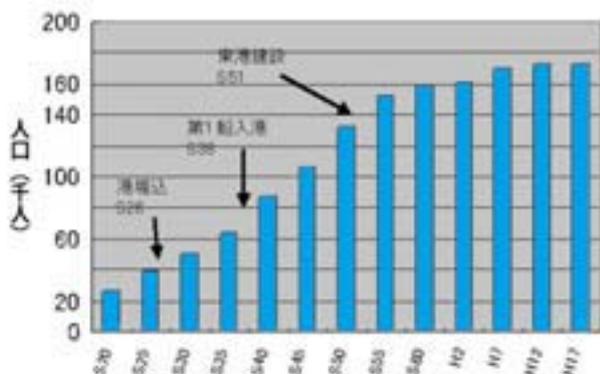
## 苦小牧の発展と苦東

苦小牧市では、昭和20（1945）年に27,000人ぐらいだった人口が15年程で倍を超え、さらに15年で倍になっています。その間26年には現在フェリーが発着している西港に着工し、38年に第1船が入港、48年には苦東のプロジェクトが始まり、51年に東港建設が着工されています。つまり、苦小牧市の人口増の背景には、港の建設と大規模工業基地プロジェクトが官民によって進められてきたことがあります。

しかし、このような開拓と開発により、自生する原野は少しずつ姿を消してきました。一方、苦東のプロジェクトが始まった昭和40年代には、本州各地でいろいろな環境問題が発生したという反省から、環境を保全する姿勢が生まれ、苦東プロジェクトでも実践されてきました。ハスカップの保全もその一つの影響緩和策「ミティゲーション<sup>※3</sup>」にあたります。

このように、自生する面積が減る中で、残った原生地を見ると、ハスカップが土地の乾燥によって枯れ始めているようだとの見方から、NPOでは昨年から調査を続けています。調査では、ハスカップと同じ仲間のベニバナヒョウタンボクがまず枯れ始めていることが分かりました。昨年の調査では、1,800～2,000本/haのハスカップが確認されましたが、40年前の調査では2,500本/haぐらいあったと記憶しています。

昭和50年代の苦東とハスカップの流れを振り返ってみると、プロジェクトが始まった昭和48年から将来を見越した移植活動を行っており、いすゞ自動車の用地造成のアセスメントの環境保全措置として、移植と地域への無償分譲が行われました。これには、この頃、



苦小牧の人口の推移

ハスカップがブームとなっていたこともあります。また、子会社ではハスカップジャムやワイン製造を行って、地域ブランドづくりも始めていました。

いすゞ自動車の造成の際に行なった樹木実態調査では、高さ30cm以上のハスカップだけでも15万本あり、これらは苦東以外でも市民に2万本、各地の農協などに1万数千本のほか、学校や企業にも分譲し、折からの減反政策と相まって、千歳、美唄、上富良野、士別、幌延などいろいろな地方へ里子に出されています。

## ハスカップ・イニシアチブ

苦東のハスカップ原野をサンクチュアリと呼ぶ由縁は、湿原のミズゴケの上に実生のハスカップが誕生していることと、成熟したハスカップの群生の両方が見られるからです。ハスカップの湿原をふかんしたり、もっと可視化する工夫や仕組みが必要だと思います。

ハスカップが勇払原野のコモン・プール資源で、みんなで共有するという考え方が生まれつつある今だからこそ、ハスカップを中心にアイデンティティを高めることとして、ハスカップを「北海道遺産」に仕立てる動きを始めたり、住民とハスカップのつながりの記録を正式に残す冊子化（出版）やハスカップの風土を保全する担い手としてNPOなどの組織づくりが必要だと思います。

これまで、開発か自然保護かでとかくネガティブに捉えられてきた風土の感覚を、「苦小牧は良いところで、これからの産業の場であり、文化の場である」ことを積極性を持って捉え直し、発信できる場にしていく。そんな取り組みである「ハスカップ・イニシアチブ」を提言したいと思います。

## ディスカッション

### ハスカップ新時代に向けて

**鈴木** ハスカップには、野生のものや栽培して利用するもの、食べたり、接して幸せになるなどいろいろな利用の方法があります。まず、ハスカップとのつながりが長い大西さんから順に、山口さんには栽培、原田さんには保全の観点から、ハスカップについての思いやコメントをいただきたいと思います。

※3 ミティゲーション (mitigation)

開発による自然環境への影響を何らかの具体的な措置によって緩和することを意味し、人間活動によるマイナスの環境影響を緩和するために、事業者に課せられるあらゆる保全行為のこと。

ハスカップはまさに市民の宝



大西 育子 氏  
女性みなと街づくり  
苫小牧代表

大西 昭和62（1987）年末に「ハスカップを広める会」を立ち上げました。沼ノ端が今のような住宅地ではなかったので、手始めにスコップとフラワーポットを持って、地主さんに許可を得てハスカップを採らせていただき、市内の公共機関や銀行の窓口で配布させてもらう活動で会がスタートしました。その後、ハスカップの料理の募集や保育園の子どもたちが描いた絵の展示などの活動をし、5年後に活動の記録として小冊子『ハスカップ』を作成して会の活動の区切りとしています。

青森県出身の祖母が、戦後何もなかったときに自生していたハスカップを近所の人たちと摘みに行って、孫である私に食べさせてくれたことが記憶にあります。樽前山神社のお祭りの宵宮で、白い砂糖をたっぷりかけて食べることが何よりの楽しみでぜいたくでした。ほろ苦く甘酸っぱく素朴な野原のにおいがして、赤ひげさんのようにになりながら口いっぱいにはおぼった思い出が蘇ります。果物が育たない苫小牧では、ハスカップはまさに市民の宝だったのです。

苫小牧に生まれ、苫小牧に生き、苫小牧に還っていく私としては、ハスカップが我が身そのものということになるのでしょうか。

オリジナル品種のブランド化に向けて

山口 苫東から里子に出された一部が厚真町に来て、栽培が始まったのは昭和57（1982）年頃からです。当時は希少価値が高く、3,000円/kgぐらいで取引さされていましたが、生産面積が広がるとともに単価が急速



山口 善紀 氏  
ハスカップファーム  
山口農園園長



大粒で酸味が少なく食味に優れた生食用品種！



大粒で甘酸適和、栗実が硬く食味に優れた品種！

「ハスカップ」から「ゆうしげ」「あつまみらい」へ

に下がり、それとともに生産者もどんどん減っていきましました。平成10（1998）年頃にハスカップのブームがありましたが、飽きられてまた価格が下がるということが繰り返されているのが、ハスカップ栽培の現状です。

厚真町でのハスカップ栽培は、勇払原野にあった株を畑に移植することから始まりました。野生なので変異も多く、農協への出荷では見た目を良くしようと粒をそろえてパック詰めをしていたので、当り外れのある作物として苫小牧では認識されていたと思います。

山口農園のハスカップの優良系統の選抜は、母が昭和53年から栽培に取り組んでいます。味の良い大粒のものを挿し木で増やして圃場を作っています。

平成14年頃に厚真町でハスカップの優良系統の調査が始まり、21年に「ゆうしげ」と「あつまみらい」という2品種が日本で2、3番目の品種として登録されています。これらの品種は、厚真町から出さないことを決め、オリジナル品種としてブランド化に向け、JAや厚真町から苗木助成を生産者にいただき、栽培されています。去年は600kgほどですが、将来的には1万本で10tを目指した計画で進めています。

苫東の希少鳥類とハスカップ・サンクチュアリ

原田 かつての勇払原野は湿地面積が8,000haでサロベツ原野・釧路湿原と並んで北海道の三大原野と呼ばれていました。それが、昭和30（1955）年には5,000ha、平成10（1998）年には8分の1の1,000haとなっています。現在、苫東の工業地帯にはかなり良い状態で自然が残っているの



原田 修 氏  
日本野鳥の会  
チーフレンジャー

で、ウトナイ湖と一体として、勇払原野の苫東地域を中心に保全活動を行っています。

苫東地域は、分譲予定地の2割ほどが分譲されただけで、そのほとんどが未利用地のままになっているのが現状です。その中で、当面の分譲から外したプロジェクトゾーンを中心に調査したところ、22種類の希少鳥類が確認され、生物多様性の分野から重要な場所であることが分かってきました。

一方、苫東の新計画では、湿原や森林と共生するア

メニティ空間という形での利用を含めて検討されています。我々も平成17年に作成した勇払原野の保全構想の報告書を基に、弁天沼を中心とした場所を鳥獣保護区に指定する要望書を二度提出しています。

安平川では、下流部に沈砂池の機能も含めた遊水地を位置付ける洪水防止対策が話し合われていますが、予定地周辺は希少鳥類のチュウヒ、アカモズ、シマアオジなどの営巣地となっています。

我々としては、工業用地はほかにも未利用地がありますが、希少鳥類の営巣地はここにしかないので、何とか遊水地として残してもらえないかと考えています。

2年程前から、繁殖期にこの場所の希少鳥類の調査を行っています。その中で去年は7種類が確認され、特に弁天沼でタンチョウが確認され、今後繁殖する可能性が高いと考えています。

残したいエリアの北部に「ハスカップ・サンクチュアリ」があって、昨年催した勇払原野自然体感ツアーでは、観察会でしたが参加者はハスカップの摘み取りに熱中していました。今後もハスカップや勇払原野の自然の魅力やその重要性を伝えていければと思います。

#### ハスカップを核にしたまちづくり

**鈴木** それぞれの立場からお話しいただきました。ハスカップを栽培化して積極的に利用することは、厚真町でブランド化に向けて取り組みがされています。園芸学の立場からだと、成熟用のハスカップのほかに機械で収穫できるような品種を育成して、原料として安く供給できる加工用のハスカップも考えられると思います。

**山口** 厚真町は3年程前からハスカップの栽培面積が日本一で、現在22haで栽培されています。今後の産地の取り組みとしては、高品質な生食用果実の安定生産をすること、在来品種の果実加工による高付加価値化を目指すこと、生産者のさらなる技術向上と平準化を図るとともに、消費・流通形態の変化に応じた販売推進として流通を改善して苫小牧だけでなく道外に向けても良い状態で販売していきたいと思っています。

**鈴木** ハスカップを核にした苫小牧のまちづくりについて、ご意見をお聞かせください。

**大西** 急速に人口が増えて、商業形態や経済・産業が変わってしまった苫小牧市では、ハスカップが息づくことが難しく、むしろ市民の意識から消えています。これまでの、ハスカップのまちづくりとは違う、苫東の工業地帯の中で市民がハスカップを共有するためにも、苫東をもっと身近に思えるようにすることが大事です。また、ハスカップが苫小牧にとって素晴らしい資源であることを苫小牧市民が知らないの、今日を機会に苫東で自生するハスカップの保存につなげてほしいと思います。

**鈴木** 勇払原野の保全にかかわる原田さんとしては、自生するハスカップについてどう思われましたか。

**原田** ハスカップ・サンクチュアリで植生が変わりつつあるというお話を伺って、そこにいろいろな方がかわることで、周辺の自然に目を向けるきっかけになってほしいと思います。

**大西** ハスカップについて、今までされることがなかった、川上から川下までのいろいろな視点での話ができただことに意義があるのではないのでしょうか。

**草苅** このフォーラムがハスカップを今後、利用・保全していくきっかけになればと思います。

**鈴木** 苫東地区全体でハスカップをもっとみんなで盛り立てていくことが必要で、そうすることが利用・保全・まちづくりにつながるということです。勇払原野が世界のハスカップの発祥の地ですから、もっとPRして、苫小牧地域の発展につながればと思います。



※ 環境コモンズフォーラムの全文は、当協会のホームページ <http://www.hkk.or.jp>に掲載されています。

